『戦後日本公害史論』出版祝賀会

写真のように、宮本憲一先生の 784 ページにおよぶ大著出版を記念した祝賀会が、昨日レポートした「対談」後に行われた。「宮本ゼミ発足 60 周年」を祝う会でもあり、多くのゼミ卒業生、研究者などが参加して盛況であった。

宮本先生の『戦後日本公害史論』については、8 月 17 日のレポートで紹介してある。祝賀会では岩波書店の編集担当の方から、本体 8200 円の高価な本が、すでに 3 刷という嬉しい報告もされた。同じ時期に 100 ページ余りの小さい本を出版し、普及状況が気になるので、3 刷とは本当に驚いた。やはり名著であること、宮本先生の長年にわたる幅広い「つながり」によるものだ。

宮本ゼミが発足して 60 年である。先生は金沢大学、大阪市立大学、立命館大学でゼミを担当されてきた。じつに 60 年におよぶゼミであり、大学院のゼミを合わせて約 500 人の学生を教育してきたという。この間に、東京都立大学の柴田徳衛先生をはじめ、多くの大学との「交換ゼミ」も実施されてきた。大学院時代に交換ゼミに参加したことがある。自分がゼミを担当した時の貴重な経験となった。今回の祝賀会に旧柴田ゼミの面々も参加していた。私は短大時代を含め 35 年にわたりゼミを担当してきたが、宮本先生の 60 年というのは、大学のなかでも記録に残る長さだ。

宮本ゼミの思い出も書きたいが、ここでは当日の資料にあった『財政学散歩』通巻 20 号から、宮本先生の「なぜ公害史を書こうとしたのか」という特別寄稿の冒頭部分を紹介しよう。なお、『財政学散歩』は宮本背広ゼミ機関誌であり、通巻 20 号になる。

私も「『最終講義』と『災後の新聞』」というレポートを書いている。

「私は経済学者(広くは研究者)の仕事は理論、政策、歴史の 3 分野を総合しなければならないと考えている。特に社会科学は実験ができないので、歴史の中に法則性を発見しなければならない。近年の経済学は条件を限定して、モデルを作って、数学的な整理で、理論を作っている。単純化するために数量化しやすい市場制度に限定して、社会の枠組みをきりすて、あるいは公共部門を取り入れる場合もそれが市場制度と同じように利害得失で動いていると仮定して処理をしている。しかし現実の経済は人間が動かしているのであって、物質の循環で動いているのではない。人間活動の歴史の中に未来を洞察できる教訓がある。戦後史はこれまで高度経済成長の歴史として語られた。しかしこの歴史は深刻な公害・環境破壊の歴史であった。戦後史の面白さはこの世界稀に見る深刻な公害を 20 年の間に独創的な方法で解決したということである。」

(2014 年 11 月 9 日)